

発熱をもう一度考える

《特集にあたって》

発熱を正しく恐れよう

過去の病気とされていた感染症が、世界を震撼させています。新型コロナウイルス感染症は、感染症が社会に与える影響力の大きさを実感させました。日常生活も非接触型体温計があちらこちらの施設の入口に設置され、自分の体温を確認してから入館するなど、影響が続いています。

日ごろ、小児科外来で診察を行っているなかで、元気な保育園児や幼稚園児、小学生らが、それぞれの幼稚園や保育園、学校の検温で体温が高いため受診を求められ、来院するケースが増えました。通知・規則により、例えば37.5℃以上は受け入れを拒否するとなっているようです。変動する体温にあって、その数字をどう評価するかは、正確な知識と判断が必要となってきます。

2021年夏には、乳幼児にRSウイルス感染症が爆発的に流行し、小児科病棟をひっ迫させるなど小児の「免疫負債」が問題になっています。「免疫負債」とは新型コロナウイルス感染症流行下で人々が互いを避けるため、通常の接触を通じて身につけるはず

の各種ウイルスへの免疫を獲得できなかった状態をいいます。

また、発熱を起こす病態は感染症だけではありません。本特集では、このような身近な「発熱」をテーマに特集することになりました。

「発熱は」生体の防衛反応であり、決して生体にとって悪いものではありません。「発熱」は生体に何を知らせてくれるのか、臨床研究の最先端に立っている医師たちに、基本的な小児の発熱についてわかりやすく概説していただきました。また、『小児看護』2015年臨時増刊号「子どもの薬」を監修いただいた伊藤進名誉教授に、子どものかぜ薬、解熱薬について巻頭カラーグラフで紹介いただきました。「発熱と疾患」については各分野で活躍されている小児科医に、「看護ケア」については最前線の看護師にそれぞれ執筆していただきました。ご協力をいただいた執筆者の方々はこの紙面をお借りして御礼申し上げます。

はしもと小児科院長
橋本政樹 Hashimoto Masaki